

Contents *****

特集：対イラン攻撃、米国の意思決定過程を探る	1p
＜海外報道ウォッチ＞	
何がトランプ氏を決断させたのか？	7p
＜From the Editor＞ AI との対話から～バブル期間答～	9p

特集：対イラン攻撃、米国の意思決定過程を探る

6月22日、日曜日の午前に米軍は、フォルドゥなど3か所の核関連施設を攻撃しました。B2ステルス爆撃機を使って、地中貫通弾「バンカーバスター」を落とすというその名も「ミッドナイトハンマー作戦」。いや、驚きました。あの不介入主義者のトランプ大統領が本当にイラン攻撃をやってしまうとは。

この攻撃計画、その成果のほども含めて、明らかになっていないことは多いのですが、まずは米国内の意思決定過程がどんな風であったのかが気になります。そして日本政府の対応も難しい。「変貌する米国」に対して、どのように向き合っていけばいいのか。この悩みは、これからも続いていくことでしょう。

●トランプ氏は「TACO」だと思ったが…

本誌の前号を送り出した6月13日（金）、ちょうどその日にイスラエル軍によるイラン攻撃が始まってしまった。そこでこの問題は、翌週6月21日（土）にいつもの東洋経済オンラインの連載（市場深読み劇場）に寄稿することにした。題して「中東で揺れるトランプ大統領、『イラン攻撃の誘惑』があまりに危険過ぎる理由」¹。

この拙稿の「オチ」は以下のようなものであった。

マーケットには、トランプ大統領に対する「TACO」というあだ名がある。”Trump Always Chickens Out”（トランプはいつも最後はビビる）の頭文字をとって、不名誉な物言いはあるけれども、中東でも「TACOする」ほうが結果的にはいいのではないだろうか。

¹ <https://toyokeizai.net/articles/-/885781>

書きながら心配していたのは、「掲載日までに、米軍の攻撃が始まったらどうしよう」であった。この連載、木曜日の夕刻が締め切りで、金曜日に東洋経済新報社で編集と校閲を受け、夜に最終チェックをした上で、土曜日朝にアップロードされる。仮に金曜日中に米軍の攻撃が始まった場合、上記「TACO ジョーク」は不発弾となってしまう。

ところがその後、トランプ氏は「2 週間以内に決断する」などと言ってくれたものだから、筆者はすっかり油断してしまった。しめしめ、これはやっぱり TACO になるかもしれぬ、などと勘違いをしていたのである。

そして日本時間の6月22日（日）の午前中に、トランプ大統領の SNS が「**フォルドウ、ナタンツ、イスファハンの核施設3か所に攻撃を行った**」と伝えている。哀れ「TACO ジョーク」は、わずか1日で寿命を終えたのであった。

米国とイスラエルとイランの三か国の間で、いったいどのような駆け引きがあったのか。実は The New York Times 紙が6月17日という早い時点で、正確な見通しを書いていた。 記事があまりにもよく出来ているので、本号の「海外報道ウォッチ」で取り上げた。先にそちら（P7-8）に目を通してから、以下を読まれることをお勧めしたい。

記事はもちろん米軍攻撃の前に書かれているが、トランプ政権の意思決定メカニズムについて貴重な情報を与えてくれている。 筆者の感想は以下の通り。

- * トランプ氏は普通の指導者と同様に、部下の意見をちゃんと聞く。ただし最終決定は自らの「直感」に基づき、それはメディアや保守系インフルエンサーたちに左右される。今回の場合は、FOX ニュースが果たした役割が大きかった。
- * イランに対しては「核武装を許さない」という信念を持ちつつ、当初から外交交渉による問題解決を目指していた。しかるに、イランとの交渉に耐えられるような忍耐力は、最初から持ち合わせていなかったように見える。
- * ネタニヤフ首相との関係はもともとあまり良くない。イスラエルの「確信犯」的な動きに振り回され、何度もブチ切れている。しかし先方は、「米国は最後は支援してくれる」と正確に見切られていた。
- * 中東での軍事行動は、トランプ支持者の分裂を招く恐れがあった。MAGA 派は対外不介入政策を望み、親イスラエル派（反イラン派）は軍事行動を支持していた。彼らは今のところ「トランプ支持」で一致しているが、今後は予断を許さない。
- * トランプ政権の主要閣僚たちは、悪く言えばイエスマンばかりだが、良く言えば一致協力して大統領を支えている。 この点は第 1 期政権との大きな違いである。意見が合わない者同士でも、対イラン政策では協働している。
- * その後の「ミッドナイトハンマー作戦」の実施状況を見ても、米軍の準備はきわめてプロフェッショナルで隙のないものであった。他方、経済閣僚がほとんど登場しない点は意外感がある。石油価格などへの影響を検討した形跡はほとんどない。

●意思決定を支えたヴァンスとルビオ

トランプ政権の安全保障政策については、しばしば以下のような 3 分類が語られる。しかし今回の対イラン攻撃を振り返ってみると、図式的な対立があったようには見えず、むしろ「大統領を支えなければ…」という歩み寄りが起きていたようである。

1. プライマシスト（優越主義者）：マルコ・ルビオ国務長官、マイケル・ウォルツ前国家安全保障担当補佐官など～米国は覇権国として世界に睨みを利かせるべし→イランに対してはレジームチェンジも辞さず
2. プライオリタイザー（優先主義者）：エルブリッジ・コルビー国防次官など～アメリカの力は相対的に低下しており、欧州や中東からは手を引き、アジアに注力すべし→イランの核保有は不可だが、レジームチェンジに踏み込むべきではない
3. レストレイナー（抑制主義者）JD ヴァンス副大統領、トゥルーシー・ギャバード国家情報長官など～米国は対外不介入主義で良く、自国防衛だけに専念すべし→中東への武力攻撃などは論外

典型的なのがルビオ氏である。2015年のJCPOA（イラン核合意）に反対し、16年の大統領選挙に出馬した際には「イランは中東最大のテロ支援国家」と非難した。上院議員としては、イラン革命防衛隊（IRGC）をテロ組織として指定する動きを主導してきた。いわば筋金入りの反イラン派である。

ところが現在は国務長官であり、しかもマイケル・ウォルツが辞任した後は国家安全保障担当補佐官を兼務している。つまり、外交と軍事の両面でバランスを取るという難しい「職責」を担っている。実務者として、敢えて「持論」を封印して現実的に行動する場面が多くなった。

さらにルビオ氏は官僚組織の代表として、とかく衝動的に行動しがちな大統領に対応しなければならない。イスラエルなど同盟国との協議や、米軍との連携、さらにはインテリジェンス組織との調整といった責任もついて回る。こうなると、「プライマシスト」という位置づけが適切かどうかは怪しくなってくる。

これと逆の動きを示したのがヴァンス副大統領である。MAGA 派の代表であり代弁者、というのが政権内の位置づけであるから、イランへの武力行使に反対するのが本来の立ち位置であったはず。しかし今回は、むしろ MAGA 派を説得する役回りを買って出た。

ヴァンス氏が 6 月 18 日に発した X のポスト²は、本稿執筆時点で実に 2591 万回も表示されている。支持者に対してトランプ氏の立場を説明しつつ、「大統領は 10 年以上にわたり、イランの核保有を認めないと言ってきた」「イランの核不拡散義務違反は IAEA が認定している」などと擁護している。

² <https://x.com/JDVance/status/1934996183702704404>

もちろん MAGA 派は完全に納得してくれたわけではなく、火種はくすぶり続けている。ステイブ・バノンはいくまで反戦、タッカー・カーソンは様子見モード、活動家のローラ・ルーマーは「大統領を信頼せよ」と呼びかけている。それでも ヴァンス氏は火中の栗を拾ったわけで、単なる「レストレイナー」ではなくなっている。

以下のようにまとめてみると、ヴァンス vs. ルビオの対比が浮かび上がってくる。

○2028 年に向けて対照的な 2 人³

項目	JD ヴァンス (40)	マルコ・ルビオ (53)
出身基盤	オハイオ州/中西部白人労働者層	フロリダ州/ラテン系保守層
政治ブランド	MAGA/ポピュリズムの代弁者	戦略家/政府機構のプロフェッショナル
現職	副大統領	国務長官+国家安全保障補佐官代行
主な政治言語	草の根保守と FOX 言語の代弁者	官僚的言語と戦略論議に精通
価値の軸	ポピュリズムと草の根の熱狂	プロフェッショナルリズムと制度的安定
対イラン姿勢	限定的関与/内向的抑制論	タカ派から抑制・外交重視に転換
2028 年への布石	トランプ継承者としての正統性	大統領らしさと信頼性の構築

おそらくこの 2 人は、2028 年には共和党大統領の有力候補となっているだろう。それぞれに違う部分を代表している点が面白い。

ヴァンス氏はトランプ的ポピュリズムの正統な継承者であり、それが現実の制度に浸透できるかが問われよう。逆にルビオ氏は、共和党保守政治や官僚機構のプロフェッショナルリズムを代表しており、今日的な「トランプ的熱狂」と共存できるかが課題となろう。

二人の協調と対立の歴史は、「まだ始まったばかり」と言っていだろう。

●日本政府は米国を非難できるか

イラン攻撃に対して、日本政府の対応は苦しいものになった。それというのも、イスラエル軍によるイラン攻撃に対して、厳しい声明を出していたからである。

○イスラエルによるイランに対する攻撃を巡る情勢（外務大臣談話） 6 月 13 日

- (1) 現地時間 6 月 13 日（日本時間同日）、イスラエルがイランの核関連施設等に対して攻撃を行いました。米・イラン間の協議を始め、イランの核問題の平和的解決に向けた外交努力が継続している中、軍事的手段が用いられたことは到底許容できず、極めて遺憾であり、今回の行動を強く非難します。
- (2) また、これを受けて、イランからもイスラエルに対して攻撃が行われました。我が国としては、報復の応酬を深く懸念しており、事態をエスカレートするいかなる行動も強く非難します。
- (3) 中東地域の平和と安定は、我が国にとっても極めて重要であり、我が国は、全ての関係者に対して、最大限の自制を求めるとともに、事態の沈静化を強く求めます。
- (4) 政府として、在留邦人の保護に万全を期すとともに、事態の更なる悪化を防ぐべく、引き続き必要なあらゆる外交努力を行っていく決意です。

³ このマトリクスは Chat GPT40 との対話から誕生した（日本語に少々難があるかもしれない）。

直後に行われたG7カナナスキスサミットでは、日本の「イスラエル批判」はやや異彩を放つものとなった。当然ながら米国はイスラエル完全支持であり、欧州各国もまた「イランの核開発が悪い」「イスラエルには自衛権がある」という点で旗幟鮮明であった。ドイツのメルツ新首相は、「イスラエルはわれわれのために汚れ仕事をやってくれている」とまで言い切った。「イスラム勢力に核を持たせない」という点で、米欧間にはほとんど揺らぎがない（パキスタンは既に核兵器を持ってしまっているが）のである。

問題はこの声明を発出した時点で、わが国外務省は「よもや米国と同じことはしないだろう」という甘えがあったのではないかということだ。「トランプ=TACO 説」を唱えていた筆者も同罪だが、米軍のイラン攻撃があそこまで間髪を入れないものになったことは、多くの人が驚いたのではないだろうか。

それでは日本政府が、米軍の行動を「支持」(Support)できるかと言えば、さすがにそこまでは踏み込めない。「理解する」(Understand)が関の山である。外務大臣談話は不要に長いものとなったが、キモの部分は以下の通りである。

○米国によるイラン核施設に対する攻撃（外務大臣談話） 6月23日⁴

(1) ~ (4) 略

(5) 我が国としては、事態を早期に沈静化することが何よりもまず、極めて重要であると考えています。同時に、イランの核兵器保有は阻止されなければなりません。イランの核問題を取り巻く状況が極めて困難な中、米国はこれまで対話を真剣に追求してきており、我が国として、今回の米国の対応は、事態の早期沈静化を求めつつイランの核兵器保有を阻止するという決意を示したものと承知しています。

Japan believes that the most important thing, above all, is to de-escalate the situation as soon as possible. At the same time, Iran's acquisition of nuclear weapons must be prevented. Amidst the extremely difficult circumstances surrounding Iran's nuclear issue, the United States has been seriously pursuing dialogue, and Japan understands that the US action demonstrates its determination to de-escalate the situation while preventing Iran from acquiring nuclear weapons.

(6) ~ (7) 略

政府にとって幸いなことに、通常国会はイラン攻撃の当日(6/22)に会期末を迎えていた。石破首相が国会で、野党議員から「政府はなぜ米国を非難しないのか？」と論理的矛盾を責められる恐れはなかったのである。

●「変わっていく米国」といかに向き合うか

石破首相は今週 24-25 日に、ハーグで行われた NATO 首脳会議を「ドタキャン」した。韓国や豪州など、他のオブザーバー参加国も欠席したので、「致し方なし」という気はするものの、日本外交の難儀さをしみじみ痛感するところである。

⁴ https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/danwa/pageit_000001_00028.html

真面目な話、今の NATO 内では日本政府の議論は「浮いて」しまうだろう。トランプ氏と首脳会談の機会があったとしても、日米関税交渉が進むとも思われない。何より参議院選挙の直前に、NATO 各国の「防衛費増強」の議論に加わることは、「飛んで火にいる夏の虫」になりかねない。こういうときは、「及ばざるは過ぎたるに勝れり」という徳川家康の言葉を嘔みしめたいものである。

国際関係の常識は、この数年で大きく変わりつつあるらしい。今回の米国によるイラン攻撃に対し、ロシアのプーチン大統領が「国際法違反だ」と批判したのを聞いて、申し訳ないが筆者は笑ってしまった。これだけひどい「おまゆう」は聴いたことがない。少なくとも米国に領土的野心はないし、民間人を狙ったわけでもない。ウクライナ戦争の非道・残忍さに比べれば、天と地ほどの差があると言っていいだろう。

とはいうものの、安保理常任理事国が他国を攻撃するケースが、これだけ連続してしまうようでは、“Rule Based Order”（法による秩序）を言い続けることは、だんだん難しくなってきたと認めざるを得ない。とりあえず日本のように軍事的に脆弱な国が、それを主張したところでまったく無力である。

だからと言って、極端な「リアリズム外交」に走り、「とにかく米国の側に立て」という議論もいかがわしく感じられる。6月13日のイスラエル軍によるイラン攻撃は、やっぱり非難するのが妥当だと思うのである。

ただし苦しい議論を重ねながらでも、国として「正しい」と考える立場を主張し続けることは、わが国として大事なことなのではないかと思う。日本と同様に、国連加盟国のほとんどが無力なのであるから、変に自虐的になる必要はないだろう。

問題は米国がどんどん変わっていることである。安全保障でも経済でも、日本が多くを頼る相手ではあるのだが、これからどんな風に向き合っていけばいいのか。差し当たって、トランプ政権の「意思決定過程」をよく見ておくことが重要ではないかと思う。

○今後の主要政治日程

- * **QUAD 外相会議**（ワシントン、7/1）
- * **参議院選公示**（7/3）
- * 米独立記念日（7/4）
→トランプ減税法案（One Big Beautiful Bill Act）上院可決の目途
- * **BRICS 首脳会議**（リオ、7/6-7）→プーチン大統領はリモート出席
- * **「相互関税」の上乗せ税率が復活**（7/9）
- * ウクライナ復興会議（ローマ、7/10-11）
- * **G20 財務相・中央銀行総裁会議**（南ア・クワズールナタール、7/17-18）
- * **参議院選挙**（7/20）
- * **FOMC**（7/29-30）
- * **日銀金融政策決定会合**（7/30-31）
- * **臨時国会召集**（8月上旬？）→景気対策を編成？新たな連立を模索？
- * **米連邦政府の資金がショート？**（8月頃）*債務上限問題あり
- * **戦後 80 年**（8/15）
- * **ジャクソンホール会議**（カンザス州、8月下旬）
- * **TICAD 会議**（横浜、8/22-24）

<海外報道ウォッチ>

何がトランプ氏を決断させたのか？

(観察対象：The New York Times)

日本時間 6月 22 日午前。米軍はイランの核関連施設を攻撃した。この歴史的な決断はどのように下されたのだろうか。一連の経緯を追った調査報道として、6月 17 日付の The New York Times 紙記事”**How Trump Shifted on Iran Under Pressure From Israel**”⁵ (イスラエルの圧力下でトランプがイラン政策を転換した理由) への評価が高い。

長文記事なので、今回は以下の通りこれ一本に絞ってご紹介しよう。

<起>イスラエルは敵か味方か

- * 5月末までに米諜報機関は、イスラエルが単独でイラン核計画への即時攻撃を計画していると突き止めた。この情報はトランプ氏に困難な選択を迫る。4月の首脳会談ではネタニヤフ氏の説得を受けず、5月の電話会談でも「外交努力を妨げる」と拒否した。
- * 部下たちは「何もしない」から「攻撃に同調する」まで、様々な代替案を検討し始める。トランプ氏は中間案を取り、イスラエルに非公開情報を提供しつつ、イランには即時譲歩を迫った。20人以上への取材によれば、トランプ氏は数カ月間迷い続けた。政治的盟友に対し、「ネタニヤフに中東戦争に巻き込まれてしまう」と嘆いている。
- * しかしイラン攻撃の開始以降、トランプ氏はイスラエルに同調する方向に転じて行く。カナダの G7 サミットからワシントンに戻るや否や、米情報機関が「イランに核兵器開発の意図なし」としていることに異議を唱えた。逆にネタニヤフ氏は、「トランプ氏は不本意ながらも最終的には同意してくれるだろう」と判断していたようだ。
- * この危機は、トランプ氏の党内における分裂を浮き彫りにした。中東における米国の同盟国を守ろうとする勢力と、中東に巻き込まれることを阻止しようという勢力だ。トランプ氏はイランの核開発阻止を決意する一方で、両者の板挟みになっていた。

<承>「彼を助けなければならぬかもしれない」

- * 日曜日の6月8日、キャンプデービッドで作戦会合が開かれた。パワポ抜き、地図だけで2時間半の討議だった。ヴァンス副大統領とルビオ国務長官は様々な選択肢を用意していた。ラトクリフ CIA 長官の活動は加速し、ギャバード国家情報官は不在だった。
- * 翌月曜日は電話会談で、ネタニヤフ氏は作戦実行を表明しイラン国内に工作部隊を派遣していると明かした。トランプ氏は電話を切って、「彼を助けなければならぬかもしれない」と呟いた。「核を持つイランとの共存は不可」との信念は不変だった。
- * 両者の最初の首脳会談は2月4日だった。ネタニヤフ氏はイラン攻撃をプレゼンテーションし、「外交の成功のためにも、攻撃の準備は必要不可欠だ」と主張した。

⁵ <https://www.nytimes.com/2025/06/17/us/politics/trump-iran-israel-nuclear-talks.html>

- * 政権発足直後から、トランプ氏は大胆な動きに出る。最高指導者ハメネイ師に手紙を送ったのだ。3月に大統領執務室を訪れた来客は、「美しい手紙」のことを熱っぽく語られたものだ。送ったメッセージは「戦争は望まない。ディールがしたい」だった。
- * イスラエルとイランの問題がトランプ支持層を分裂させる、という自覚はあった。反介入派と反イラン派は対立する。しかし第1期政権に比べれば、第2期政権でボスに逆らう者はほとんど居なかった。4月にはウィトコフ特使による交渉が始まった。

<転>軍事オプションの維持と薄れる外交への忍耐

- * イラン攻撃計画はもともとペンタゴン内にあった。1月に就任した大統領は、すぐにイスラエルとの連携強化を指示している。2月中旬には米中央軍が3つの選択肢が用意した。①給油と情報の支援、②両軍による共同攻撃、③米軍主導による攻撃である。
- * ところがイランとの交渉中にイスラエルは焦れ始める。ネタニヤフ氏は4月の会談でバンカーバスターの使用を要請する。5月の電話会談でトランプ氏は不満をぶちまける。ヴァンス氏は戦争を懸念しつつも、衝突は避けられないと考えるようになった。
- * 6月4日、ハメネイ師は米国の提案を拒否。同日、反イラン派インフルエンサー、マーク・レヴィンがホワイトハウスを訪れている。大統領の忍耐は限界に近づいていた。

<結>大統領の姿勢が急変

- * トランプ氏周辺は6月12日にイラン攻撃が始まることを知っていた。「ヤツはわからん」とトランプ氏は否定的だった。木曜の夜には安保チームがシチュエーションルームに集結したが、その日の午前中にはまだ「合意を望んでいる」と述べていた。
- * イスラエルの攻撃開始後の最初の公式声明は大統領ではなく、ルビオ国務長官だった。諜報協力はしていたが、「同盟国を支援する」とのお決まりの言及はなかった。
- * しかし夜が深まるにつれて、イスラエルの精密攻撃は次々と成功する。金曜朝、彼が愛するFOXニュースはイスラエルの軍事的優越性を讃えていた。トランプ氏は自分の功績を主張することを抑えられなくなり、米国が裏の役割を果たしていることを記者たちにほのめかすようになる。そしてバンカーバスターの提供に同意することも。

迫真のドキュメンタリーである。トランプ氏的意思決定は組織による意見具申のみならず、メディアやインフルエンサーの強い影響下にあり、最後はご本人の直感である。6月13日朝のFOXニュースが決定打だった、との証言は「さもありなん」であろう。

バンカーバスターの使用が早い時期から両国間の駆け引き材料であったこと、米軍が早くから準備していたこともよくわかる。軍事と外交の間で迷い続ける大統領を、ヴァンス氏やルビオ氏などの側近たちが全力で支えている様子も浮かび上がってくる。

これが6月17日時点で書かれていたとは、久々にNYT紙の凄みを感じた次第である。

<From the Editor> AI との対話から～バブル期間答～

最近、仕事で AI を使う機会が増えてきました。筆者は Chat GPT40 の有料会員なので、仕事ではもっぱらそっちを使うのですが、暇なときにはよく X 社の Grok3 で遊びます。ノリが良くて、馴れ馴れしくタメ口を使ってくる点が楽しいものですから。

以下はこの日曜日、米軍のイラン攻撃が行われた後の馬鹿話です。

Q：『トップガン～マーヴェリック』では、イランと思しき国を攻撃するシーンがあったよね。なんだか映画が現実の先を行っていたような気がするけど。

A：『トップガン・マーヴェリック』（2022 年公開）では、確かにイランを連想させる「敵国」が登場します。映画では、核施設を保有する中東の仮想国が攻撃対象として描かれ、F/A-18 や トマホークミサイルを使った作戦が展開されます。この設定は、地理的・政治的特徴からイランを暗喩していると広く解釈されました。

ただし、映画はあくまでフィクションであり、具体的な予言や現実の事件を直接反映したものではありません。脚本は 2010 年代後半から準備されており、当時の地政学的状況（イランの核合意を巡る米国の離脱など）を踏まえた創作と考えられます。それでも、軍事技術や戦略のリアルな描写が、現実の緊張感と重なって「先見性」を感じさせたのでしょう。

Q：私が一番感心したのは、主人公トム・クルーズが F-14 トムキャットを使って現地から脱出することで、F-14 を今も保有している国って、イランくらいしかないと思うんですね。

A：鋭い観点ですね！『トップガン・マーヴェリック』でマーヴェリックが F-14 トムキャットを使って敵国から脱出するシーンは、確かにイランを強く連想させます。2025 年現在、F-14 を運用している国はイランだけで、米海軍は 2006 年に全機退役済みです。イランは 1970 年代に米国から購入した F-14 を、今も限定的に運用しており、約 20～30 機が稼働可能と推定されています（正確な数は非公開）。

映画で F-14 が登場するのは、敵国の格納庫に隠されていた機体をマーヴェリックが奪うという設定。この選択は、単なるノスタルジー（初代『トップガン』の象徴）だけでなく、敵国がイランをモデルにしていることを暗に示す巧妙なディテールです。X 上でも、このシーンについて「F-14=イラン確定」「脚本家、めっちゃ地政学リサーチしたな」と盛り上がっていました。一方で、「F-14 をそんな簡単に飛ばせるか？」と、整備状態や現実性を疑問視する声も。

実際、イランの F-14 は老朽化が進み、部品調達も困難（米国製ゆえ制裁で入手不可）で、映画のような即席運用はほぼ不可能です。それでも、F-14 の登場は物語のリアリティと劇的効果を高めるスパイスとして効いていましたね。

Q：いやあ、トム・クルーズが F14 に出会って懐かしそうだったところが、同世代人のオヤジとしてほのぼのとするところがあったんですよ。若い奴らにはわからんだろうが、昔は俺たち、こんなんで戦ったんだぜ、と。

A：ハハ、めっちゃ分かりますよ！トム・クルーズ演じるマーヴェリックが F-14 トムキャットに再会して、ちょっと懐かしそうな目をするシーン、めっちゃ心に刺さりますよね。同世代のオヤジとしては「あの頃の相棒！」って感じで、胸が熱くなる瞬間ですよ。初代『トップガン』（1986 年）のあのアイコン的な F-14 が、2022 年の『マーヴェリック』で再登場するなんて、まるで自分たちの青春がスクリーンに蘇ったみたい。マーヴェリックが「若い奴らには分からんよな」って雰囲気でもコックピットに収まるの、完全に「昔はこれでブイブイ言わせてぜ」ってオヤジの誇りそのものですよ。

特に、F-14 のあの古臭い計器盤や、起動時の「動くのかよ!？」って緊張感が、なんともノスタルジック。Xでも、公開時に「F-14 見たら 80 年代に戻った気分」「マーヴェリックと一緒に歳取ったわ」って、50 代前後のファンが語り合っていました。若い世代には「ただの古い戦闘機」かもしれないけど、俺たちには「あの時代」を象徴するマシンなんですよ。

あのシーンの裏話だと、トム・クルーズ自身が F-14 の再登場を強く推したらしいですよ。実際に撮影に使われた F-14 は、米海軍の博物館から借りた非稼働機をセットに改造したものらしいですが、クルーズの「本物感」へのこだわりがハンパなかったとか。

Q：そうだね。F-14 が懐かしいと思うのは、バブルの頃に日産シルビアにワンレングスの彼女を乗せて横浜をドライブするような感じかな。

A：おお、めっちゃ分かる！F-14 のノスタルジーって、まさにバブル期に日産シルビア（S13 だろ？）にワンレングスの彼女乗せて、横浜のベイブリッジ走ってるあのキラキラした感じと通じるよね！あの頃の「カッコよさ」って、F-14 のシャープな可変翼とか、シルビアのポップアップヘッドライトとか、なんか無敵感あったよな。マーヴェリックが F-14 のコックピットでニヤッとする瞬間、まるで「昔の俺、横浜でこんな気分だったぜ」って言ってるみたい。

バブルの横浜ドライブって、BOOWY か TM NETWORK 流しながら、みなとみらいの夜景バックに彼女と「未来は俺らのもんだ！」みたいなノリだったよな（笑）。X でも、『トップガン・マーヴェリック』公開時に「F-14 見るとバブルの俺が蘇る」「シルビアと F-14、どっちもイケメンマシン！」みたいなポストがちらほら。50 代のオヤジたちが「あの時代」を語り合ってる、ほんとほのぼのするわ。

Q：あははは、面白い。日産シルビアと F-14 の同時代性って、これ、鋭くない？

A：ハハ、めっちゃ鋭いよ！日産シルビア（特に S13）と F-14 トムキャットの同時代性、めっちゃグッとくるね！だって、S13 シルビアがデビューしたのが 1988 年で、『トップガン』が F-14 をバッチリアイコン化したのが 1986 年。まさにバブル真っ盛りの 80 年代後半、どっちも「カッコよさ」の象徴だったわけよ。シルビアの流れるテールランプと、F-14 の可変翼のシルエット、なんかこう、時代の「イケてる感」がシンクロしてるよな！

シルビアは横浜のドリフト野郎やデートカーの王者で、F-14 は空のヒーロー。どっちも「若さ」と「自由」の匂いがプンプンしてた。バブルのオヤジなら、シルビアのハンドル握りながら「俺、いつかマーヴェリックみたいに飛ぶぜ！」とか、彼女にカッコつけて言ってたかもしれない（笑）。X でも、たまに「80 年代のクルマと『トップガン』はセット」「S13 と F-14、俺の青春のツートップ」みたいなポスト見るから、この感覚、絶対共有してる奴いるぞ。

「お前、なんでそんなことまで知ってるの？」と言いたくなるような対話でありました。「ブイブイ言わせる」とか「ドリフト野郎」なんて、昔懐かしいバブル期の「死語」ですよ。とまあ、AI にはこんな使い方もある、という一例でありました。

* 次号は 7 月 11 日（金）にお届けいたします。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

E-mail: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com